

上原 美術館 通信

No.
20

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2023年1月11日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



日本近代洋画を代表する画家のひとりである梅原龍三郎(1888-1986年)。その芸術を形づくる上で重要な舞台となったのが伊豆でした。梅原は生涯を通じて伊豆の各地に滞在し、そこで新たな芸術を生み出していきます。本展では伊豆と梅原芸術の関係を探るほか、滞欧期から梅原様式の確立、晩年の豪華な作風へと展開するその芸術の魅力を紹介します。梅原龍三郎に焦点をあてた上原美術館の展覧会は2009年の『梅原龍三郎とルノワール—出会いから100年—』以来、約13年ぶりの開催となります。

梅原が初めて伊豆に滞在したのは大正5(1916)年末から翌年春にかけて、20代の終わりに訪れた熱海だったといえます。梅原は21歳でフランスへ渡り4年間滞り、老齡のルノワールから直接多くを学ぶなど、充実した日々を過ごしました。しかし、帰国すると日本の風土をどのようにあrawすか模索が続きます。油彩の厚塗りによる《熱海風景》(図1)はそうした時期に描かれた風景画です。それから2年後の大正8(1919)年12月、梅原は伊豆の東海岸・網代に滞在中、新聞で師ルノワールの訃報に触れます。「ミジー(引用註:南フランス)の景色によく似た伊豆の海岸で写生して居て一日としてカイニュの庭とルノワール先生の面影の思ひ浮ばぬ日はなかつた。一日、寫生から帰つてきて新聞で十二月四日にルノワール先生の死んだ事を知つて足もとから地が裂けて來た様な驚きと悲しみに打たれた」。梅原自身の回想からは、ルノワールの思い出と伊豆の風景が分かち難く結びついていることが分かります。翌年、梅原は家財を売って渡仏し、ルノワールの遺族と再会。その後、イタリアのナポリなどを訪れて、再び制作に勢いを取り戻します。

大正13(1924)年はじめ、梅原は伊豆半島の西海岸、沼津市の口野に滞在しました。翌年夏にはその近くの江ノ浦、次の夏には牛臥を訪れます。それから約10年の間、夏や冬に家族とともに伊豆やその周辺に滞在して制作しました。静岡市の興津で描かれた《興津 家族》(図2)には、椅子に座る長男・成四と艶子夫人に抱えられた次女・紅絵、その傍に立つ長女・紅良とお手伝いの女性が親密な雰囲気の中で描かれ、当時のゆったりとした時の流れを感じさせます。

昭和6(1931)年からしばらくの間、梅原は友人の写真家・野島康三が所有する熱海の別荘で夏を過ごします。野島は写真館を経営する傍ら、大正8(1919)年に兜屋画堂を開いて絵画の展覧会を開催、岸田劉生や中川一政、柳宗悦、富本憲吉など幅広い文化人と交流しました。こうした人々との交流は新たな梅原芸術の萌芽を育んだと考えられます。野島別荘の室内で椅子に座る《紅良像》(図3)は、屋外から差し込む光が色彩そのものによって大胆にあらわされています。その色面構成には日本古来の伝統絵画との関連も感じられ、師ルノワールの影響を越えた独自性を見出すことができます。この別荘からは眼下に来宮と魚見崎を一望できました。《來の宮》(図4)の画面中央付近には東海道線の線路が走っており、昭和初期の交通事情も垣間見えます。

昭和11(1936)年、梅原は約10年ぶりに沼津の江ノ浦を再訪しました。そのときに描いたのが《江ノ浦 残月》(図5)です。沸き立つような朱色の山が静かな海面にうっすらと姿を映し、海岸の家々や船は人々の営みを感じさせます。山際には月が残り、大和絵の「やりがすみ」のような雲が雄壮な気配を漂わせます。夜から朝に移り変わる朧気な光を大胆な色彩で捉えた本作は、同年の国画会展に出品され評判となりました。梅原に師事した画家・久保守によると、この絵の反響から「江ノ浦ときけば、何か好ましい情緒がただよっているように思えて、伊豆の写生旅行には多くの画家達がこの地を訪れた」といいます。この色彩への興味は、間もなく描き始める桜島や北京のシリーズへと続きます。

第二次世界大戦が激しくなる昭和18(1943)年末、梅原は現在の伊豆の国市・古奈にあった白石館の離れに疎開します。伊豆に来るきっかけとなったのは、韮山在住の画家・柏木俊一との繋がりで、昭和19(1944)年、伊豆北部の空襲が懸念されると梅原は古奈を離れて、大仁ホテルに場所を移します。梅原は離れの2階をアトリエにして、制作を始めました。《Eve》(図6)は画家自身が「戦争中の大仁ホテルで静かに描いた」という作品です。神に禁じられた果実を口にして原罪を負うイヴの姿は、愚かな戦争を行う人類に重ねられるかのようです。昭和20(1945)年7月17日の沼津空襲は、大仁ホテルからもその火が見えたといえます。その後、梅原は修善寺の奥、筏場に一時疎開し、終戦を迎えました。大仁ホテルでは、新たな画題に出あいます。昭和20(1945)年1月に描いた《富士》(図7)は、富士山シリーズの最初期の作品です。終戦後も梅原は大仁を訪れて、昭和30(1955)年頃まで

富士山の姿を多く描き、梅原の代表的な画題として広く知られることとなります。戦中の昭和19(1944)年6月には東京美術学校(現・東京藝術大学)の教授に任命され、梅原は伊豆から上野へと通いました。

昭和22(1947)年から数年間、秋は沼津市の三津にある岡部長景(初代・国立近代美術館館長)の別荘に滞在し、その離れにある富士見堂から海に浮かぶ淡島や富士山を描きました。海や空の青と木々の緑を基調とする《富士山図》(図8)はここから描かれた作品です。光を浴びた富士と装飾的な海の対比には、梅原自身の繊細さと豪放さが同時にあらわれています。本展ではこうした伊豆の作品と合わせて、滞欧期の代表作である《黄金の首飾り》、《ナルシス》などの初期作品や梅原様式を確立した円熟期の作品を展示し、梅原芸術を概観します。また、梅原が愛蔵した李朝の壺やキュクラデスの石像、仏画などから、美に対する鋭い感性にも迫ります。梅原が愛した伊豆の地で、梅原芸術の魅力をどうぞご堪能ください。(土森)

本展ではこうした伊豆の作品と合わせて、滞欧期の代表作である《黄金の首飾り》、《ナルシス》などの初期作品や梅原様式を確立した円熟期の作品を展示し、梅原芸術を概観します。また、梅原が愛蔵した李朝の壺やキュクラデスの石像、仏画などから、美に対する鋭い感性にも迫ります。梅原が愛した伊豆の地で、梅原芸術の魅力をどうぞご堪能ください。(土森)

昭和22(1947)年から数年間、秋は沼津市の三津にある岡部長景(初代・国立近代美術館館長)の別荘に滞在し、その離れにある富士見堂から海に浮かぶ淡島や富士山を描きました。海や空の青と木々の緑を基調とする《富士山図》(図8)はここから描かれた作品です。光を浴びた富士と装飾的な海の対比には、梅原自身の繊細さと豪放さが同時にあらわれています。

本展ではこうした伊豆の作品と合わせて、滞欧期の代表作である《黄金の首飾り》、《ナルシス》などの初期作品や梅原様式を確立した円熟期の作品を展示し、梅原芸術を概観します。また、梅原が愛蔵した李朝の壺やキュクラデスの石像、仏画などから、美に対する鋭い感性にも迫ります。梅原が愛した伊豆の地で、梅原芸術の魅力をどうぞご堪能ください。(土森)



図1 梅原龍三郎《熱海風景》大正6(1917)年、東京国立近代美術館蔵



図2 梅原龍三郎《興津 家族》昭和3(1928)年、個人蔵



図3 梅原龍三郎《紅良像》昭和6(1931)年、個人蔵



図4 梅原龍三郎《來の宮》昭和10(1935)年、個人蔵



図7 梅原龍三郎《富士》昭和20(1945)年、上原美術館蔵



図8 梅原龍三郎《富士山図》昭和22(1947)年、個人蔵

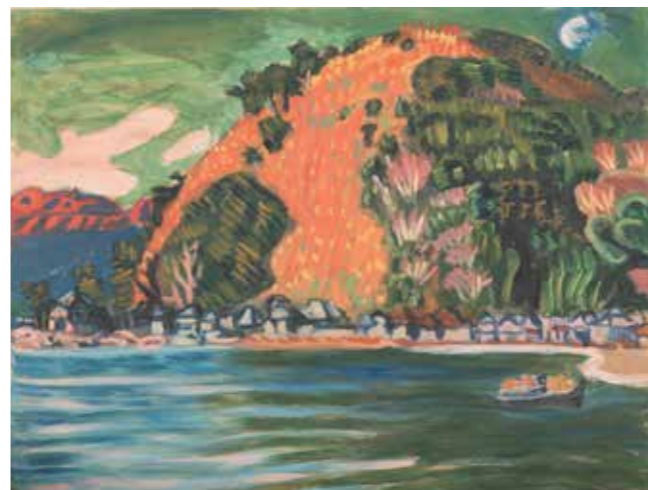


図5 梅原龍三郎《江ノ浦 残月》昭和11(1936)年、上原美術館蔵、新収蔵・初公開

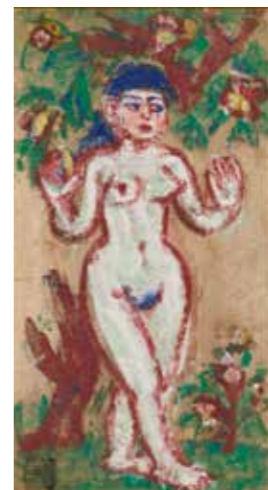


図6 梅原龍三郎《Eve》昭和20(1945)年、東京国立近代美術館蔵



釈尊最後の教えは「弟子たちよ、おまへたちは、おのおの、自らを灯火とし、自らをよりどころとせよ、他を頼りとしてはならない。この法を灯火とし、よりどころとせよ、他の教えをよりどころとしてはならない」であったとされます。お経は、釈尊が語った言葉とされ、仏教徒がよりどころとすべき「法」を具体的に伝えるものです。また、仏教には仏の悟りこそが、仏の本体とする思想もあり、お経の一字一字は仏そのものでもあります。お経は仏教徒にとって特別なものであるため、心を込めて書写されるとともに、特別な料紙を用いたり、美しい見返し絵を描くなどして、美しく装飾されました。本展では、奈良時代から平安時代に制作された美しい装飾経を展示します。

平安時代後期には、深い藍色に染めた料紙に、金字で経文を書写する紺紙金字経が多数制作されました。名高いものに、奥州藤原氏の初代、藤原清衡が制作した中尊寺経、鳥羽天皇の発願による神護寺経、鳥羽天皇の皇后であった美福門院が発願した荒川経があり、いずれも一切経です。一切経とは、お経(経蔵、經典)、律蔵(僧が守るべき戒律)、主要な論蔵(経や律の注釈書や研究書)を網羅したもので、当時権威のあった仏典の目録、『貞元新定釈教目録』(貞元釈経録、貞元録)に基づき、約5400巻から構成されていました。当館では、すでに収蔵していた中尊寺経、神護寺経各一卷に加え、新たに荒川経一卷を収蔵したことを記念し、この三つの古写経をあわせて展示いたします。

中尊寺経は金字と銀字が交互、神護寺経は金字で経文を書写しています。金字に関して言えば、この二つはいずれも純金の微粒子を膠で練った金泥を用いていますが、中尊寺経の金は厚く、他と輝きが異なります。また、近年の化学分析の結果、荒川経の金字には真鍮のような銅の合金を用いていることが判明しました。三経の金の輝きや色の微妙な違いを実物でご覧ください。また、三つはいずれも表紙見返し



荒川経(紺紙金字大般若経・卷一四二) 平安時代後期

しに釈尊の説法場面を描いていますが、それぞれ図が異なりますので、見比べてみるのも楽しいと思います。

鎌倉後期から南北朝時代に描かれた「善財童子絵」も、新収蔵品です。本図は『華嚴経』の入法界品の一場面を描くもので、もと二巻からなる長い巻物の一場面が切断された断簡です。入法界品は、仏の悟りを目指す菩薩の道を求める善財童子が、普賢菩薩の勧めで、各地にいる五十三人の善知識を訪ね、教えを受けるさまを記すもの。本図はこのうち、善財童子が、三十四人目の善知識である善知識衆芸童子に出会う場面を描いています。本図が描く場面は、淡彩の着色とあわせて詩情豊かで、二人の童子の姿は愛らしいです。

また本展では、平安時代の雲紙法華経断簡、心西という僧が長寛元年(1163)、自らの極楽往生を願い、紺紙に銀泥で宝塔を描き、その中に法華経の一字を納めた一字宝塔法華経断簡(心西願経)も新収蔵、初公開します。「きれい」なお経と、「かわいい」挿絵の入ったお経や絵巻の断簡を是非ご覧ください。(田島)



善財童子絵 鎌倉～南北朝時代



雲紙法華経断簡 平安時代



一字宝塔法華経断簡 平安時代(長寛元年・1163)

深い紺色に染めた紙の上に、小さな塔が何基もひしめき合うかのように銀泥で描かれた紺紙金字経の断簡。よく見ると宝塔は一基ずつ銀泥で引かれた升目の中に目一杯収まっています。一行に十五基ずつ並んだ塔の大きさは、升目のゆがみで多少の差はありますが、塔身はほぼ円のふくよかなシルエット、塔身の上には三角の笠形やその上に載る宝珠が描かれています。五輪塔のような姿でしょうか。塔身の中には金泥で文字が一文字ずつ書写されています。

本作品で書写されている經典は「法華経」巻六、薬王菩薩本事品第二十三です。この部分は次のような内容が説かれています。薬王菩薩が過去世において、日月浄明德如来を供養しようとします。神通力を持つ薬王菩薩は美しい花を降らせ、香をもって供養するなどさまざまな事を行います。しかし自らの体で供養をすることが本当の供養になると思い、ついに自らの体に火を灯して燈明とし、その光は遍く世界を照らして如来を供養しました。その後、薬王菩薩は次の世で生まれ変わっても、日月浄明德如来の仏舍利を収め

た塔の前で両腕に火を灯して供養を行ったという劇的な場面が説かれています。

宝塔の中に一文字ずつ文字を入れたものは一字宝塔経と呼ばれています。經典の文字を一つずつ塔の中に書写する装飾経はあまりなく、代表的なものを挙げると通称、戸隠切と呼ばれている一字宝塔法華経が挙げられます。長野県戸隠神社に伝来したこの法華経は、一行に八基の宝塔を綺羅刷りし、流れるような行書で法華経を書写したものです。筆者は平安時代後期に能書家として名をはせた藤原定信と伝えられています。一字宝塔経は単に經典を装飾するというだけでなく、書写されている法華経の思想を反映しているものと考えられています。經典の文字一つ一つが仏をあらわし、その文字を塔で囲むことで、仏を莊嚴し供養する塔を建立しているのでしょう。

本作品は長寛元(1163)年に心西入道という人物が、極楽往生を願って発願した法華経の一部分になります。当初は法華経八巻、開経、結経あわせて十巻のセットとして作られました。江戸時代には京都・安楽寿院に伝来し、



一字宝塔法華経断簡(部分) 平安時代(長寛元年・1163)

現在は奈良国立博物館などに分蔵され、ほかは断簡として諸家に伝わっています。

かわいらしい小さな塔には、それぞれがみほとけである聖なる文字が座している——新収蔵の《一字宝塔法華経断簡(心西願経)》は企画展「きれいなお経 かわいいお経」にて展示しております。往時の人々が願いを込めて飾り、書写した經典をぜひご覧ください。

明治に生まれ大正、昭和に活躍した梅原龍三郎は、豪放で絢爛な画風で知られています。しかし、その奥には梅原の繊細な感性が息づいており、それこそが梅原芸術の魅力の源泉となっています。そうした多様な特質は、絵をつぶさに見ていくこと、画家の調査研究を進めることで、改めて目の前にあらわれてきます。

近年の研究成果の一つとしては、梅原の滞欧日記の調査が挙げられます。梅原は21歳の夏、フランスへ渡り、その冬、南仏に住むルノワールに直接、会いに行きました。画家自身が記した文章「ルノワールの追憶」によると、渡仏後、間もなく美術館でのルノワール作品との出会いに衝撃を受けたことがドラマチックに記されています。しかし、滞欧日記からは、様々な美術館や画廊を巡るうちに、徐々にその魅力に引き込まれたことが明らかになりました。この研究を行ったのは梅原龍三郎の曾孫である美術史家の嶋田華子氏です。その成果は、書籍『梅原龍三郎とルノワール』（中央公論美術出版、2010年）にまとめられています。梅原の滞欧日記を紐解くと、パリ到着時に安井曾太郎と津田清風がリヨン駅まで迎えに来たこと、二人の「顔が見えてうれしい」

という率直な気持ちなども記されており、まだ何者にもなっていない若き画家たちの生き生きとした姿が見えてきます。

今回、新たに発見されたのは、伊豆滞在時に記していた梅原の伊豆日記です(特別展『梅原龍三郎と伊豆』にて展示)。伊豆の古奈や大仁、そして天城の筏場に疎開していたときの日記には、サイレンや飛行機の音など、戦中の様子が生々しく記録され、終戦時の日記の表紙には「八月十五日終戦の大詔下ル 天下一変」と書かれています。一方で、近所の人にヤマメをもらったり、友人の画家・柏木俊一が葦山から頻りに訪ねて来たり、孫を連れて長岡の日赤病院に行く日常も垣間見えます。こうした一次資料研究は「巨匠」という枠組みに当てはめられがちな梅原芸術の、本来の魅力に迫るきっかけになります。

それぞれの作品をじっくりと見ることも重要です。当館では今年度、梅原龍三郎《江ノ浦 残月》(昭和11年)を新たに収蔵しました。本作について、過去の図録では「油彩・カンヴァス」と記されていましたが、当館調査で紙に描かれていることが分かりました。梅原は《江ノ浦 残月》に先立つおよそ10年前、ほぼ同じ構図で《江ノ浦》(大正14

年)をカンヴァスに描いています。この作品について、梅原は「この頃はどっちかという光ということを意識していた」といい、昭和11(1936)年の江ノ浦の風景(梅原はこのとき残月と暮色を描いています)には、「この方が色が相当いい色になっている」、「光より色調に興味が変わって来たのだ」と述べています(『日本現代画家選 梅原龍三郎』美術出版社、1953年)。こうした言葉からは、梅原がこの頃、色彩への興味を深めており、その意識のもとさまざまな技法を試している様子を見ることができます。《江ノ浦 残月》のなめらかな波のタッチには、紙と油彩を用いた効果があらわれます(空には水溶性の絵具が使われているようにも見えますが、今後の調査課題です)。翌年、夜明けの桜島を捉えた《朝暉》(昭和12年、当館蔵)は、油彩に岩絵具を混ぜてカンヴァスに描かれており、この時期、さまざまな画材を使って光を色彩であらわそうとした梅原の制作意図が垣間見えます(詳細は『上原美術館通信』No.10参照)。

作品や資料を詳細に見ていくと、まだ気づかなかった梅原芸術の魅力が眼前にあらわれます。近代洋画の一次資料研究は始まったばかり。これからの洋画研究の進展から目が離せません。



梅原龍三郎の伊豆日記の一部。昭和20(1945)年の日記表紙(左)には「八月十五日終戦 大詔下ル 天下一変」と記されています。



梅原龍三郎《江ノ浦 残月》左下の拡大写真。支持体に紙を使うことで、絵具に滑らかな質感が生まれています。(全図は3ページ図5参照)



画面左上の拡大写真。海や山に用いられた画材とは異なる質感が見られます。

ギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会内容について、担当学芸員が解説を行いました。展覧会会期中は毎月第3土曜日、近代館は10時より、仏教館は11時より開催しています。

※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、やむを得ず中止になる場合がございます。詳細は当館ホームページ、公式SNS等をご覧ください。

授業入館

9月15日 立正大学仏教学部研修、11月11日 南伊豆町立南伊豆中学校、11月14日・17日・28日 下田市立下田中学校、11月25日 伊豆市立修善寺中学校、12月9日 南伊豆町立南伊豆東中学校

奈良や京都方面へ修学旅行に行く中学生には、仏像の見分け方を解説し、東大寺や三十三間堂で拝観できる仏像についてもお話ししました。

研修受け入れ

11月9日 下田市立浜崎小学校教員研修

教職員を対象とした美術鑑賞教育研修として、美術館やアートカードを利用した鑑賞の授業を体験していただきました。

出張授業

9月22日 下田市立大賀茂小学校、10月17日 山崎学園・富士見中学校、11月8日 河津町立小学校3校合同授業、11月18日 静岡県立稲取高校

大賀茂小学校、富士見中学校は修学旅行の事前学習として、仏像の見分け方をお話ししました。河津町の3つの小学校は中学校へ入る前の児童間の交流会として、グループに分かれてアートカードでゲームを行いました。稲取高校は「印象派とジャポニスム」と「ゴッホ」について授業を行いました。

番組

伊豆の魅力を紹介する番組『いい伊豆みつけた』(伊豆急ケーブルネットワーク制作)の「心気ままに出かけてみたら…伊豆・下田の旅」(リポーター久保沙里菜さん)の回で、当館が紹介されました(11月24日 テレビ埼玉、11月25日 テレビ神奈川、ちばテレビ)。番組YouTubeでもご覧いただけます。

トークイベント

12月11日に特別展「無冠の仏像」に関連して、ゲストに仏像好きフリーアナウンサーの久保沙里菜さんをお迎えしたトークイベントを開催しました。当日は田島整主任学芸員が久保さんと一緒に伊豆や静岡県内の仏像について対談を行いました。静岡県富士市ご出身の久保さんには伊豆や静岡の仏像の魅力を語っていただきました。当日は多くのお客様にご来場いただきました。

対外活動

10月29日 芸術の秋～日本画を描いてみよう～(於:伊豆の国市)、10月11日・25日・11月8日・22日・12月6日 かなみ仏の里美術館ボランティアガイド養成講座(於:函南町)、10月30日 下田市史講座・伊豆の鎌倉仏(於:下田市)、12月4日 河津秋祭り講演(於:河津町)、12月20日 静岡県博物館協会講習会(於:静岡市)

土屋絵美学芸員が伊豆の国市市民講座にて大人を対象とした日本画を描くワークショップを行いました。

田島整主任学芸員は、かなみ仏の里美術館からの依頼でボランティアガイド養成の講座講師を務めました。また下田市史講座にて伊東氏、北条氏ゆかりの仏像を中心にお話をしました。河津町観光協会主催の河津秋祭りでは、河津平安の仏像展示館にて、フリーアナウンサーの久保沙里菜さんと南禅寺仏像群について対談を行いました。

土森智典主任学芸員は静岡県博物館協会・事業推進グループで講習会「LED照明の現在2022」の運営を行いました。





仏像ギャラリー内にかかる額。40年前は入口に掲げられていました。

上原美術館は今年の11月3日でリニューアル開館5周年を迎えました。これもひとえに当館へご来館くださる皆様、応援してくださる皆様のおかげです。職員一同、感謝申し上げます。今後も当館らしさとともに、より良い美術館を目指してまいります。

実は来年度、上原美術館の前身の一つである上原仏教美術館が下田の地に誕生して40年となります。開館以来、伊豆や静岡の仏教美術調査を行う研究機関としても活動を続けてまいりましたが、これは地域の皆様のご協力がなければ出来ないことと思います。これからも地域文化の発展を目指して、調査研究や、研究成果にもとづく企画展、さまざまなワークショップを行ってまいります。

(櫻井)

上原美術館では令和5年4月からの教室受講生を募集しています。

※各教室の最大継続受講年数です

日本画教室 ※3年間

講師 牧野伸英先生(日本画家、日本美術院特待)

日時 毎月第2・4火曜日 13:00~16:00

デッサン・水彩画教室 ※3年間

講師 小野憲一先生(現代美術作家)

日時 毎月第2・4水曜日 13:00~16:00

仏像彫刻教室 ※8年間

講師 岩松拾文先生・大谷文進先生(仏像彫刻家)

日時 毎月第3日曜日 9:30~12:00

写経教室 ※3年間

講師 山田修也先生(書家、毎日書道展審査会員)

日時 毎月第2日曜日 13:00~15:30

仏像美術講座 ※1年間

講師 当館学芸員(交代)

日時 毎月第2日曜日 10:00~11:00

会場 上原美術館アトリエ(各教室とも)
受講料 無料(用材、写生会の施設入場料等は実費負担)

募集人数 各教室とも若干名、仏教美術講座のみ25名(応募者多数の場合は抽選)

受講条件 全日程参加できる方、ご自分で通える方(お1人1教室のみ応募可) ※初心者迎

応募方法 氏名、年齢、住所、電話番号、ご希望の教室名、経験の有無を明記の上、郵便ハガキもしくはEメールにてご応募ください。申し込み締め切りは2023年3月10日(必着)です。美術館受付でもお受けいたします。なお応募結果は3月15日頃、応募者全員に郵送で通知いたします。

お申し込み先 〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
上原美術館「教室募集」係

Eメール info@uehara-museum.or.jp



特別展カタログ発行のお知らせ

特別展「無冠の仏像—伊豆・静岡東部の無指定文化財」のカタログを発行いたしました。展示したすべての仏像の写真と解説、および論考が掲載されています。

1冊1,000円で美術館受付にて販売しております。詳細はお電話(0558-28-1228)

またはEメール(info@uehara-museum.or.jp)にてお問合せください。